

巻 頭 言

信州大学・環境科学研究会の再開を目指して

信州大学の環境科学研究会は二十年の歴史がある。私は信州大学に赴任して十年程度であるが、最初の出会いは諏訪湖ユスリカ対策で、学際的な研究組織を編成し相応の地域的貢献をした。また、県内のゴルフ場建設ラッシュに伴う農業散布による環境汚染問題にこの研究会はフォーラムの開催や単行本の出版をしている。その後、エイズの国際的流行が起き、私は共生の観点から環境教育に関心を持ち、最近までこの分野に関わる多様な実践・研究活動をしてきた。

ところが、数年前に思いもよらない事柄が学内に持ち上がった。それは工学部に附置の地域共同研究センターが信州環境問題研究会を設置し、地域の官民共同の環境対策に関わる研究開発を行うという話である。当初、その組織が本研究会も吸収する姿勢で語られ、学内的な混乱を生みだした。しかし、話し合いを重ねるうちに大方の見解は二つの研究会は相補関係の存在だと落ち着いた。ところが、大学本部から受けていた従来の研究費が付かない事態から、その対策にいろいろと当たったが、結局はゼロ査定に終わり、現在に至っている。

世の中では、環境対策の比重は増大しており、学際活動が格段と推進される必要があるのに、それが本学では逆行する実態を生んでいる。私どもは上記の問題に対して、何とか本来の目的を目指した体制の再編成が必要である。そんな不測の事態から、ここ数年は年報編集も遅れがちになり、投稿原稿も従来に較べて少なかったが、昨年春に関係の皆さんに年報をお届けできた。

従来、環境問題はマイナス面から捉える場合が多く、その社会対策をプラス面から捉える支援環境に関する補完的視点が弱いのが実態である。世の中は共生／共存を理念とする”spiritual well-being”の時代に入っており、上記二つの捉えを合理的に行う価値転換が必要になっている。しかし、そうした感覚的理解を教育・実践・研究に矛盾なく生かせる学問体系はまだ出来あがっていない。

従来の分析科学指向の発想が邪魔し、本来の人間的感性を生かせてないのが現状であり、同様なことは環境問題だけでなく多分野で起きている。その意味で、私達は国際、学際、職際的な交流、すなわち異なる体系同志の協力活動が必要になっている。自分の専門分野の殻に安住しないで、現実社会の問題解決を直視する姿勢で今後の環境対策に臨みたいので、会員諸氏の今後の前向きな参加を改めて要請し、気持ちを新たに再開の道を共に歩みたい。

平成 11 年 3 月

信州大学環境科学研究会
世話人代表 丸地信弘